

『都市及田園の教育』

藤原喜代蔵 著

金港社 [刊]

1913年 23cm／740頁 図書番号 OE-0082

藤原喜代蔵は、1883（明治16）年鳥取県東伯郡東郷町（現湯梨浜町）に生まれた。1891（明治24）年に尋常小学校に入学するが、2年程で退学している。記録に残る藤原の学歴は、この期間のみのようである。

日露戦争従軍後、読売新聞社記者となり、教育問題の担当者となった。1909（明治42）年に『明治教育思想史』を発表した後、文部省の留学生として2年間イギリスに滞在した。帰朝後、帝国教育会に迎えられ、雑誌『帝国教育』の編集を担当した。

本書は、藤原がイギリス留学後に発表した『大英國の教育』の姉妹編をなすものである。第1編「都市の教育」では、彼が模範的な都市教育と考えるロンドンの初等教育から大学教育、実業教育の教育事情をつぶさに紹介する。例えば、小学校教育については、教科目・学年ごとの模範過程や、小学校教員の養成制度などを詳しく記している。大学教育については、ロンドン大学設立の経緯からその組織や教育制度、とりわけ大学の特徴である分科制度について明らかにしている。実業教育及び補修教育については、単元制度の実施によって教育効果の改善が見られた件について、制度を採用した都市の事例を挙げて紹介している。また、ドイツについても、主要都市の実業教育の実例を紹介している。

そのうえで、国の教育として総括的に見た場合、イギリスの教育はドイツに及ばないが、自主的・自治的な点、優秀な児童に対する給費制度や教員養成機関の設置、教育のための税徵収と、それによる教育費負担など自由裁量の広さ、地方化の程度においてドイツの教育に勝る。それは、ドイツは中央集権的教育制度を施しているのに対して、イギリスは民主的民治政策によって地方分権的教育の発達を推奨するために外ならないと述べている。

第2編「田園の教育」では、初等教育を中心に、イギリスを主として欧米の事情を紹介している。藤原は、わが国の修学児童のほとんどが田園学校をもって学業全部を終わるにもかかわらず、その課程は田園には不適切な都会同様のものであること、田園学校は教育官庁及び政治家から顧みられることが少なかったために幾つかの地方において教育が不振であること、田園学校の大多数が設備不完全で、教員の大多数もまた専門的・職業的教育のいずれにも素養が乏しいことを指摘する。

田園教育が不振をきわめる最大の原因是、田園の人口と富とが漸次減少して大都市に吸収されるためである。都会と田園との両要素が一致協同しなければ国家は到底強大になることはできないのだから、都会熱はなるべく早く減退させるべきであり、都会生活と田園生活との平衡状態を保たせなくてはならない。

都市及び田園の教育問題は多数の問題を包含する政治問題であり、経済学的又は社会学的問題でもあることから、藤原は教育家と社会学者との提携の必要性を訴える。そして、「廿世紀教育の大任務は、田園の青年子弟を田園生活及びそれに關係する一切の物事を愛着せしめ、実際的課業によりて田園の偉大なる遺産を繼紹し且つ之を適宜に保存改善せしむる點にあり」とする。

（山野辺香葉・市政専門図書館司書主任）